2015年12月31日了

中山トンネル物語

藤原詩響　著

― 目　次 ―

【1】待ち合わせ
【2】民俗資料館
【3】大砲車
【4】子持ち観音様
【5】タイムトラベル
【6】深江の砂浜
【7】宮行きさん
【8】中山峠越え
【9】峠の切り通し
【10】事故
【11】夜の話し合い
【12】解決に向けて
【13】トンネル掘り
【14】トロッコ
【15】女子衆の活躍
【16】貫通石
【17】帰還
【18】母の迎え
【19】我が家の宝物
【20】トンネルとの再会

【１】待ち合わせ

「ダダダダ―」

家じゅうに大きな音が響いた。

リョウの母　「リョウ、階段、駆け下りたらあぶないでしょ！」

リョウ　「母さん、行ってきまーす。」

リョウは玄関に放り投げていたランドセルをガシッっとつかむと、外に飛び出した。

庭の大きな柿の木は、朝日で緑に輝いている。

通学路沿いの水路の水は田んぼに流れ込み、田は鏡のように青い空を映し、春に植えられたイネがその中ですくすくと育っている。

リョウは『中山』に住んでいる。中山は山で囲まれたなだらかな土地で、たくさんの田んぼと畑があり、五月になると緑に満ち溢れる。

リョウ　「ちぇ！急がないとな・・」

道は上り坂になった。坂のてっぺんにはトンネルがある。

リョウ　「このトンネル坂があるから学校に行くのがメンドウッチいんだな。」

そうつぶやきながらトンネルを抜けると、坂の下の方に新幹線の線路が見えた。そこは『更地』という場所で、中山の隣村ということになる。リョウはそこで友達と待ち合わせていたのだ。

リョウ　「遅れたー、すまんすまん。」

ケン　「いいよー」　のんびり顔で答えたのはケンである。ケンは更地に住んでいる。

奈菜　「許せん！」　にらんだのは奈菜である。奈菜は『深江』に住んでいる。深江は更地より更に海近くに下った場所にある。

三人は結構近くに住んでいる４年２組のクラスメートである。

リョウ　「ケンと奈菜は、ええのう、毎日“クソ”トンネル、越えんでもええから」

奈菜　「何言ってるのよ。トンネルにクソなんて付けるもんじゃあないわ！」

リョウ　「ハイー、奈菜様―。」リョウは奈菜に敬礼をした。

「ところでケン、奈菜、・・社会のあの宿題済ませたか。」

ケン　「なに？」

奈菜　「社会？ああ、『昔の人が使った道具しらべ』のこと？私まだよ。」

リョウ　「そうか。じゃあなあ・・・、市民センターの近くに民俗資料館ってのがあるらしい・・・日曜日に行ってみるか」

ケン・奈菜　「うん！！」ケンと奈菜はうなずいた。

【２】民俗資料館

日曜日になった。
三人はいつものように更地の新幹線のガード下で待ち合わせた。

リョウ　「シュッパーツ！」
今日の目的地は民俗資料館である。

リョウ　「あった！・・・ここが民族資料館みたい・・」奈菜がいち早く見つけた。
三人は古びて茶色くなった木の門をくぐった。

ケン　扉が少し開いている。中は薄暗い。

リョウ　「おい、入ろうぜ。」
電気がついていない。中はほとんど真っ暗である。しかし目が慣れるといろんな物が見えてきた。昔の道具だ。

奈菜　「さ・わっ・て・は・い・け・ま・せ・ん・・って書いてあるよ。」

リョウ　「おい、これ、うちのおじいが使ってたのと同じだ。」
リョウは近くにあったカゴにヒョイと手を伸ばした。

管理ばあさん　「あんたら！！！」
ビクッっとして三人が振り返ると、闇の中に・・・頭から布を被った人影が立っている。

奈菜　「キャー！」奈菜は叫んだ。

管理ばあさん　「何しとるんね、あんたら。さっわったらいけんと書いてあるじゃろう？」
「ここに在るものはのう、昔の人たちが使っていた道具じゃ。田んぼや畑で一生懸命使ってた道具じゃ。」

リョウ　「ただの壊れかけた道具じゃないか・・」とリョウが呟いた。

管理ばあ様　「そう、ただの道具じゃ。・・・しかしな、道具がないと田んぼからお米が取れんぞ。畑から野菜が取れんぞ。人は食べないと生きて行かれん。ここに在る道具は命の元じゃ。一生懸命働いて、大切に使った道具には、使った人の魂が宿っとるのよ。」
ばあ様の眼は、細く、優しくなった。

【３】大砲車

奈菜　「リョウ、あやまりんさいよ。」

リョウ　「・・・・・」リョウは黙ったままだ。

管理ばあ様　「いやいや、よろしい。しかし、ここに在るものは大切にせやあならんぞ。絶対に！」

ばあ様はそう言うと、隣の部屋に消えて行った。

リョウ　「・・・薄気味悪いばあさんだなあ。」

ケン　「おーい、リョウ、あっちの部屋に何かあるぞー。」

三人は、奥の部屋に入って行った。

リョウ　「これ、なんだ？」

リョウが部屋の一番奥にドンと居座っている大きな物を見つけた。

ケン　「車がついているから、荷物運ぶ物かなあ。」

リョウ　「でも、荷物を載せるところがない。これじゃあ運べないよ。」

奈菜　「ここに何か書いているわ・・・た・い・ほ・う・ぐ・る・ま。」

リョウ　「たいほうぐるま？おい、物知りケン、意味分かるか。」

ケン　「エヘン！それはですねえ・・。大砲っていうのは、鉄砲の大きなやつで、ピストルの大型バージョンですね！！」

奈菜　「さっすがー、ケン博士―。形が大砲に似てるから大砲車なのね。」

リョウ　「何に使うんじゃろう？」

「ここを押すのかなあ・・・」

リョウはそう言って大砲車をいじり始めた。

奈菜　「さ、触ったらいけんよ。」

リョウ　「ええじゃん、動かしてみようぜ・・・。せえの」

ガタッ！！

大砲車が大きく動いた。その時である。

「グワーン、グワーン、グワーン・・・・」

壁と天井がビリビリ震え、部屋全体がグルグル回りだし・・

≪≪ドカーン！！

「うわー！！」「キャー」

三人は大きな渦に巻き込まれて行った。

【４】子持ち観音様

リョウ　「ウーン・・・」
リョウは目を覚ました。辺りを見ると、ケンと奈菜も倒れている。
リョウ　「おい、起きろ！」
ケン　「ふわーい・・・眠いなあ・・」
奈菜　「うーん、あれ？私たちどうしたの？」
リョウ　「分からん・・・」
ケンはまた眠り始めた。
リョウは立ち上がって、遠くを見た。
リョウ　「おい、奈菜、ここは高い崖の上だぞ。下は海だ。それに、変だなあ・・・。目の前に見える島は、宮島？でもちょっと違うんだなあ・・・。」
奈菜も立ち上がり、海の方を見た。
奈菜　「うん、あれは宮島みたい、でも・・・建物が少ないわ・・」
リョウ　「船が小っちゃいし、木で出来ていて、手で漕いでる！」
その時ケンが目を覚ました。
ケン　「うわーッ」
リョウ　「どうした？」
地面に寝っころがったまま、ケンは空を指さし、固まっている。
ケン　「巨人だあ！」
リョウはケンの指さす方を見上げた。
どデカい化け物が二人を見下ろしている。
リョウ　「うわー！！」リョウも尻餅をついた。
奈菜　「なに驚いてんの、これ観音様よ。頭に布をかぶってるでしょ。深江の子持ち観音様」
リョウ　「な、なんだ。・・ただの銅像かあ。それにしてもでっかいなあ。」
奈菜　「ほら、胸のところに穴が開いてるでしょ。中にお地蔵さんがふたつ入ってるの。だから子持ち観音。」
ケン　「ほんとだ！二つ入ってる。」
リョウ　「おいみんな、崖の下に下りてみようぜ。」
三人は細い下り道を駆け出しました。
リョウは駆け下りる前に、観音様をもう一度振り返った。観音様の表情が、民俗資料館のあのばあ様にどことなく似ている気がしたのである。

【５】タイムトラベル

奈菜　「やっぱり、なんか違うんだわ・・。」
坂を駆け下りた奈菜は立ち止まってしまった。
リョウ　「奈菜、どうしたんだ？」
奈菜　「だって、いつもの深江と全く違うんだもん・・。」
奈菜は不安で泣き出しそうになっている。
奈菜　「２号線には信号機が無いし、車が全然走ってない。それに・・・」
奈菜は声を詰まらせて続けた。
奈菜　「道も、舗装してない土のまんま。」
ケン　「ほんとじゃー」
奈菜　「海辺には家がたくさん建ってたはずだけど、砂浜になってる・・」
ケン　「おい、リョウ。スマホ、持ってるか。」
リョウ　「うん、持ってる！」
ケン　「母さんに電話してみろ。」
リョウ　「さすがケン博士だな、よし。・・・・・ダメだー、つながらない。」
ケン　「そうかあ・・・」
リョウ　「うわー、大変だ。スマホで今日の日付見たら・・・」
ケン　「どうした？」
リョウ　「５月１５日」
ケン　「いいじゃん、あってる５月１５日の日曜日だろ。」
リョウ　「うん。だだし１９３６年の５月１５日なんだ。」
奈菜　「１９３６年？なによそれ、８０年も昔ってこと？」
リョウ　「うーむ、僕たち８０年前にワープしたみたいだ。」
奈菜　「えっ、うっそー。私たち元の時代に戻れるの？」
リョウ　「分かんない。ケン、ワープについて、何か知らないか。」
ケン　「一つ知ってる！」
リョウ　「なんだ？」
ケン　「未来から来たってことを、この時代の人にバレると元の時代に帰れなくなるんだ！」
奈菜　「えー！！怖いよう。」
リョウ　「よし、みんな、絶対にバレないようにするんだぜ。」

【６】深江の砂浜

しばらくしてリョウが言った。

リョウ　「さっきから何か匂ってくるんだけど、誰かオナラでもしたのか。」

奈菜　「なによ、見ないで！！私じゃないわ！」奈菜は向こうを向いた。

リョウ　「ケン、お前か。」

ケン　「オレじゃあねえよー。」

リョウ　「おかしいなあ。さっきからずっと匂ってる・・」

ケン　「ほんとだな。」

リョウ　「おっ、向こうから人がやってくるぞ！」

ケン　「何か、押してるー。」

奈菜　「大砲車？　大砲車だわ。」

大砲車がすぐそばまでやってきた。

リョウ　「おじさん、大砲車で何してるんですか」リョウがきいた。

秀治おやじ　「お前たち、知らないのか？」

ケン　「えっ、えっ、知って・・・やばい・・」

秀治おやじ　「なんだ、知らないのか。下肥を運んでるんだよ。」

奈菜　「しもごえ？」

秀治おやじ　「うんことしっこだ。」

奈菜　「うんことしっこ！？」

秀治おやじ　「そうよね、うんこは、畑に入れると野菜がグングン育つ。栄養があって美味しい野菜になる。」

リョウ　「へー！でもすごく匂いますよね・・。」

秀治おやじ　「慣れたら平気だ。だってな、お前たちのお腹の中にもうんちが入ってるじゃあないか。それが体の外に出ただけだ。出たら畑の宝物になる。」

ケン　「うんちが宝物？」

秀治おやじ　「決まってるだろ。お金出して遠いとこまで買いに行くんだ。」

リョウ　「えー！買うんですか。」

秀治おやじ　「当ったり前よ。このうんちは宮島の人たちのうんちだ。船で深江まで運んできて、浜の肥つぼに貯めとくんだ。ほらあれが肥つぼだ。」

浜に壺のようなものが埋まっている。

奈菜　「ホント、埋まってるわ」

奈菜は自分の住んでいる深江がそんな役割のある大切な場所だったとは、今まで全く知りませんでした。

秀治おやじ　「ここから今度は大砲車で中山まで運ぶのさ。」

リョウ　「えー！僕の中山までですか。」

秀治おやじ　「中山のもんは宝が来たと大喜びよ。」

【７】宮行きさん

秀治おやじ　「お前たち、これからどうするんだ？」

リョウ　「え？ぼくたち？中山に帰ります、よ、な。」リョウはとっさにケンと奈菜を見た。二人はうなずいた

秀治おやじ　「おー、それは助かった。それなら大砲車を一緒に押してくれ。行くぞ。」

ケン　「何か面白いことになってきたな。どうする、リョウ。」

リョウ　「ここに居ても仕方ない。行ってみようぜ！」

三人は大砲車を押し始めました。

ケン　「それにしてもおやじさん、この大砲車って面白い形をしていますね。」ケンは不思議そうにたずねた。

秀治おやじ　「じゃろう。ここに桶をぶら下げる。桶はぶら下がっているから坂道になっても、桶の中のうんちは傾かない、つまりこぼれないというわけだ。大した工夫だ。」

ケン　「すげー！」

秀治おやじ　「この大砲車は、更地の人が発明したんじゃ。」

ケン　「えーっ！更地の人が？」ケンは誇らしげにリョウを見た。

宮行きさん　「秀治さん、おはようございます。今日もいいお天気で。」

前からきた女の人が挨拶をした。

秀治おやじ　「おう、宮行きさん、おはよう、いいお天気ですなあ。」

女の人は背中に大きな荷物をかついで深江の海の方へ歩いて行く。

奈菜　「おじさん、名前『秀治さん』っていうんですね。」

秀治おやじ　「おうっ、そうだ。よろしく。」

「さっきのあの方、お知り合いですか？」

秀治おやじ　「そうだよ、中山の人だ。宮行きさんだ。」

奈菜　「宮行きさん？」

秀治おやじ　「ほんと君たちは知らないことが多いなあ。宮行きさんってのはだな、中山で採れた野菜を宮島まで売りに行く人のことだ。背中の背負子には、採れたての美味しい野菜がいっぱい詰まってる・・。重たいぞ。」

奈菜　「ふーん。でも、わざわざ運ばなくても、宮島で野菜作ったらいいのに。」

秀治おやじ　「ははは、それがダメなんだ。」

奈菜　「どうして？」

秀治おやじ　「そりゃあ宮島は神様の島だ。島全体が神様の体。神様の体を耕すってことは、体に傷をつけることになる。だから宮島での畑作りは昔から禁止だ。」

奈菜　「えー！！」

奈菜は、宮島の直ぐ前の深江に住んでいるが、知らないことばかりだ。

秀治おやじ　「宮島の人たちは、中山の野菜を売ってもらう。中山の人たちは、宮島のうんちを売ってもらう。こんな助け合いが昔からずっと続いている。助け合うってことは素晴らしいことだ。ほら、今日は君たちが私を助けてくれているいる・・」

子どもたちは一段と胸を張って大砲車を押した。

【８】中山峠越え

海岸からずいぶんと奥にやって来た。坂が急にきつくなる。

奈菜　「あれ？ここは対厳山？グリーンハイツの入口・・ウッ」

奈菜はあわてて口に手をやった。

秀治おやじ　「え？聞こえんぞ。さあ、更地峠だ。しっかり押してくれ。」

奈菜はびっくりした。いつも通学するグリーンハイツの入口がない。対厳山は山のままで、深江から更地に行くにはこの峠を越えていたようだ。

秀治おやじ　「更地に着いたぞ。いよいよ中山峠を越える。しっかり押してくれ。」

リョウ　「おい、ケン、更地に新幹線がないぞ。」

ケン　「ほんとだ！！」

秀治おやじ　「何をぶつぶつ言っとる・・。ここから中山峠みちじゃ。」

目の前に山が迫ってきた。おやじは山の方に向かっていく。

リョウ　「秀治おやじさん！こっちの道を行こうよ。そっちより楽だよ。トンネルがあるんだ。」

秀治おやじ　「ん？そっちに道？そんなもん有りゃあせん。トンネルもない。寝ぼけるな。しっかり押せ。」

リョウ　「えっ？中山にトンネルが無い？」

ケン　「うん、確かそう言ってた・・・」

道は急に狭くなり、きつい坂道になった。

リョウ　「こんな道を上がるんですか」

秀治おやじ　「おう、そうだ。上がる。しっかり押せ。」

下肥の入った桶が、目の前でブランブランと揺れ出し、タポン、タポンと音を立て始めた。

ケン　「大砲車って、すごい！もし桶を台に乗せてたら、とっくに中身がこぼれちゃってますね。上から吊り下げているからこぼれない。素晴らしい発明です！」ケンは研究熱心である。

秀治おやじ　「さあ曲がるぞ！」

奈菜　「おやじさん、道は何で真直ぐにつけないんですか。くにゃくにゃして操縦が難しいじゃあないですか。」奈菜が押しながら言った。

秀治おやじ　「ははは、真直ぐな道にしてみろ、坂が急すぎて登れやしない。くにゃくにゃさせて、少しずつ登って行くんだ。」

ケン　「うわー、タッポンタッポンして、うんちのしずくが飛んでくるー・・」

秀治おやじ　「そんなこと当たり前じゃ。うんち被る覚悟せんと、この仕事は出来ん！」

その時、背負子を担いだ女の人が汗を拭き拭き峠の向こうからやってきた。

奈菜　「あっ宮行きさんだわ。」

宮行きさん　「あら、秀治様、ご苦労様です。」

秀治おやじ　「はい、宮行きさん、ご苦労様です。お気を付けて」

子ども達　「ご苦労様です」

奈菜　「おやじさん、宮行きさんもこの道を通るの？」

秀治おやじ　「当ったり前よね、この道しかないからね。」

奈菜　「宮行きさんも大変。こんな坂道を重い荷物を背負って。でも狭い道だと譲り合うから、なんかあったかいね。」奈菜の心もホカホカしてきた。

【９】峠の切り通し

木々の間から覗く青空が次第に大きくなり、山道は少しずつ明るくなってきた。峠が近いようだ。

秀治おやじ　「ようし、ここらで一休みだ。」おやじが子どもたちに声を掛けた。

ケン　「ふー、助かったー。」

ケンはへなへなと道路脇に座り込んだ。

奈菜　「わたし、もうダメ・・、足がガクガク。」奈菜も座り込んだ。

秀治おやじ　「この場所が、中山峠の切り通しだ。」

リョウ　「切り通し？」

秀治おやじ　「切って通した道だから切り通しだ。道の両側が壁になっているだろう。切り通しが出来る前は、この壁のずっと上を道が通っていたんだ。山を切り取って道を低くした。これで峠道がずいぶんと楽になったんだ。

奈菜　「ほんとだ、この場所は、山が切り取られて道が低くなってるわ。」

リョウ　「誰が掘ったんですか。」

秀治おやじ　「そりゃあ、中山と更地と深江のみんなが時間をかけて少しずつ掘ったんだ。今ずっと登ってきた中山の峠道は、みんなで作って、きれいにしてきた。通る人が安全で楽なようにね。」

奈菜　「中山の峠道って、越えるの大変だけど、なかったらもっと大変だね。みんなの宝物ですね！」

秀治おやじ　「おう、それが分かってくれたか、うれしいねえ。」

リョウは中山という言葉が出て来るたびに、妙にこそばゆく、うれしくなってきた。

秀治おやじ　「ようし、休憩終了！中山に向けて出発進行だ！」

おやじがスクッと立ち上がった。リョウもスクッと立ち上がった。

秀治おやじ　「中山峠には、切り通しが二つある。この先のもう一つの切り通しを越えたら、後は下りになる。がんばれ！」

子どもたちはウキウキしてきた。大砲車を押す手にも力が入る。

最後の曲がり角に差し掛かった、その時である。

【10】事故

道路の端を踏んだケンの足が、ズルッと滑った。
「あっ！」
ケンは思わず大砲車にしがみ付いた。
大砲車はグラッ揺れたかと思うと、道から大きく外れ、ガラガラッと斜面に崩れ落ちた。
「うわーッ！！」
「きゃーッ！！」
子どもたちも斜面に投げ出され、ズリズリっと滑り落ちた。
その子どもたちの上に大砲車がゴロン！！と転がってきた。

秀治おやじ　「危ない！！」秀治おやじが叫ぶ。

ガシャッ！

大砲車は側の木に引っ掛かって、止まった・・
秀治おやじが斜面を駆け下りてきた。

秀治おやじ　「みんな！大丈夫か！」

奈菜　「痛いよー」奈菜が泣き始めた。

リョウは手を擦りむいたが、幸いにもたいした怪我ではなかった。
奈菜のヒザから少し血が出ていたが、他には怪我はない。
ケンは、怪我はないようだが・・・うんこまみれだった。

【11】夜の話し合い

やっとの思いで中山にたどり着いたリョウたちは、その夜は秀治おやじの家に泊めて貰うことになった。秀治おやじの父は村の世話をする長老である。

長老　「大変な山越えだったらしいのう。今夜はこの家でゆっくりして行きんさい。」長老が言った。

その夜の事である。

リョウたちが眠っていると、隣の部屋から大きな声が聞こえて来た。

リョウは起きてふすまの間からそっと隣の部屋を覗いた。

村人１　「そがいな事は出来ゃーせんよー」

村人２　「ほいでもやってみにゃーわからんけえの」

荒々しい声に、奈菜も目を覚ました。

奈菜　「どうしたの？」

リョウ　「分からないけど、たくさんの人が集まって話し合ってる。」

奈菜　「喧嘩にならないといいけど・・・」

村人３　「誰が掘るんかいのー。わしには畑の仕事がある。」

村人４　「金がいっぱいかかるでえ」

村人５　「わしら更地や深江のもんはあんまり関係ないけんのう」

村人６　「しかし、トンネルができたら深江と更地と中山が近くなって、便利になるぞ。」

リョウ　「おい、奈菜、中山にトンネル掘る話し合いみたいだぞ。」

奈菜　「真剣な顔だね、みんな。」

村人７　「長老さん、役場はお金出してくれるんかいのう。」

長老　「役場に行って頼んできたんじゃが、難しいと言って断られてしもうた。金はわしらで出すしかない。」

村人８　「えー！わしらが出すんか。」

村人９　「おまけに仕事休んでトンネル掘りかあ。やれんのう。わしゃ、反対じゃ。」

村人 10　「第一、手で掘るんじゃろ？岩は堅くて歯が立たん。何年かかるか分からん。やめろ、やめろ。」

【12】解決に向けて

物音に気付いたケンも起きてきた。その時である。

秀治おやじ　「わしゃあ、聞いたんじゃが、親戚筋にダイナマイトを扱える者がおってのう。今ちょうど中山に来てるらしい。ダイナマイト使ったら岩に穴をあけられるかも知れん。」

聞きなれたあの声は、秀治おやじである。この会議に参加していたのだ。

村人 11　「ダイナマイト？使ったら、また金がかかるでえ。」

秀治おやじ　「お金じゃけど・・・。わしの家の裏に田んぼがある。わしゃあ、それで銀行からお金を借りて村のために使ってもいいと思ってるんだ。」

ケン　「秀治おやじ・・すげえ」

秀治おやじ　「それにより、中山峠の切り通し、あれも大変な仕事じゃったけど、深江と更地と中山の村人が力を出して作った。というか・・わしらのご先祖様がわしらのためにあの中山の峠道を作り、歩きやすいようにずっと整備してくれた。だからわしらが今生きていけてる。わしらが今せにゃあいけん仕事は、何じゃろか。」

部屋はシーンとなった。

リョウは、秀治おやじの顔をじっと見た。

村人 12　「うーん、もし中山にトンネルが出来たら、深江や更地から宮内村に行くのも便利になるなあ。

村人 13　「大砲車で中山峠を越えるのは大変だ。それに宮行きさんの野菜運びも大変だ。トンネルが出来たら、男衆も女子衆も、いっぺんに楽になるのう。」

秀治おやじ　「実は今日の昼間、大変なことがあった。深江で知り合った子ども 3 人が大砲車を押すのを手伝ってくれたんだが、中山峠のてっぺんに来た時、大砲車が斜面に落ちて、大変な事故になる所じゃった。幸いにも大きな怪我はなかったんだが、子どもたちには大変申し分けないことをしてしまった。しかし、皆の衆、トンネルを掘ることはわしらだけの問題じゃない。これからこの土地で生まれ育つ子供たちが安全に豊かに育つためには、やっぱりト ンネルが要る。それが今生きているわしらの仕事じゃないか。わしはそう思う。」

会場はシーンと静まり返った。

リョウ　「おい、ケン、奈菜、これから生まれてくる子っておれたちの事なんだよな。」

ケンと奈菜　「うん・・・」

長老　「皆の衆、意見は大体まとまったようですなあ。しかし掘るとなったら大変ですぞ。ダイナマイトがあるとしても、手でも掘らんといけません。掘り出した岩を外に運び出さないといけません。男衆も女衆も、村が一丸となってやらないといけない仕事になりますぞ。しかし、トンネルが出来上がったら、村は確実に豊かになりますのう。さあ、皆の衆、今夜はここまでにしましょう。」

リョウは聞きながら両手を強く握りしめていた。

【13】トンネル掘り

「カーンカーンカーン」つるはしで岩を砕く甲高い音が中山峠に響き渡る。
ついにトンネル掘りが始まったのである。
長さ 90m、幅 2.5m、高さ 2.5m。中山側と更地側の両方から同時にトンネルは掘り進められた。

リョウ　「おぉ～ 始まったぞ！ケン、奈菜 トンネル掘り見に行こうや！」

ケン　「うん、行ってみよう！」

奈菜　「大人の人たち、ずっと話し合いよったもんね。どうやって掘るんじゃろ。」
３人は わくわくしながら音のする方へと向かった。
村人が何人も来ていて、秀治おやじの姿もそこにあった。

秀治おやじ　「おぉ、あんたら来たんか。いよいよ始めるで。手伝ってみるか？」
秀治おやじはリョウとケンにつるはしを渡した。
二人には、重たいつるはしを振り上げるだけでも一苦労である。
その上、固い固い岩盤に、とてもじゃないが、かなわない・・・

リョウ　「秀治おやじ、いっこも砕けんよ！」

秀治おやじ　「おいおい、あんたら若いんじゃけえ、しっかりしんさい。村の若いもんも年寄りも、みんなが力出しおうてやらにゃあ トンネルは出来んのんじゃけえ。じゃが、怪我はするなよ。」

奈菜　「中山のあのトンネル・・、こうやって掘たんじゃね。大変じゃん！」

リョウ　「このトンネル・・、俺が毎日通学する時、通ってるあのトンネルなんじゃろ？」

ケン　「よお掘ったなあ・・、ほんま、信じられんよ。」
３人がひそひそと話をしていると、

【14】トロッコ

村人　「おい、あんたら、ちょっとこれを押してくれんか？」
と声を掛けられた。３人が振り向くと、そばに木の箱に山積みにされた岩がドーンと置かれていた。

リョウ　「え、僕たちですか？ これ、どうするんですか？」

村人　「今ここで砕いて出た岩よ。これを外へ運び出さんにゃあいけん。トロッコに載せとるけえ、３人で外まで押していってくれんか？

リョウ　「え～こんな重そうなやつ～」
リョウは思わず尻込みをした。

ケン　「よし！僕、やってみるよ！」

リョウ　「おぉ、ケン、えらくやる気になっとるじゃん。」

ケン　「あのトンネルが、こうやってみんなの力でできたんかと思うと、なんか、手伝わんにゃあいけんような気がして・・」ケンはリョウにつぶやいた。

奈菜　「よっし、みんなで押そう！せえの！」
３人はありったけの力を出してトロッコを押した。
ゴロ・・、ゴロ・・、ゴロ・・。トロッコがじわりじわりと進む。
リョウはトロッコを押しながら、毎朝「このトンネルの坂が無ければいいのに・・・」と思っていた自分を思い出していた。

【15】女子衆の活躍

次の日の朝になった。目が覚めた奈菜は、台所からコトコトという音が聞こえて来るのに気づいた。

奈菜　「何してるんですか。」

女子衆１　「おや、奈菜ちゃんかい、おはようさん。」

大きな鍋にぐらぐらとお湯が沸き、数人の女の人がせっせと働いている。

女子衆１　「工事の男衆に出すごちそうを作っているのさ。力つけてもらわないとね。」包丁で野菜を刻みながらおばちゃんが言った。

女子衆２　「そりゃあ今回のトンネル掘りは、今までとは違う大仕事じゃ。お腹も空きなさろうて。私ら女子衆もがんばらんとね。」

村の顔役の家では工事の人たちに出す食事が、このように女子衆によって毎日作られていたのだ。

奈菜　「私も手伝っていい？」

女子衆２　「もちろんさね。」

女子衆３　「奈菜ちゃん、こっちの仕事を手伝ってよ。」

奈菜　「何作ってるんですか？」

女子衆３　「塩むすびだよ。男衆には大人気なんだよ。」

お昼が近づいた。

女子衆４　「奈菜ちゃん、工事現場に持って行くよー。来るかい？」

奈菜　「はーい！」

リョウ　「ケン、おれらも行こうぜ！」

女子衆と子どもたちは工事現場に向かった。

女子衆１　「皆さん、御飯ですよー。」

男衆１　「おー、いつも済まねえなあ。」つるはしを置いて次々と男衆が集まってきた。

奈菜　「はいどうぞ。」奈菜は塩むすびを差し出した。

男衆２　「この塩むすび、うまいんだなあ・・。」

女子衆２　「今日の塩むすび、奈菜ちゃんが作ってくれたんだよ、ね、奈菜ちゃん」

奈々　「はい。」

男衆２　「おっ、今日のは格別にうまいはずじゃあ。」

男衆３　「中山の米は特に美味いんだよなあ。それというのも中山には水車小屋を建てた人がおってのう。誰でもそれを使えてのう。だからつきたてのお米が食べられる。中山はいい所じゃ。」

「わたしもいただきまーす」奈菜は塩むすびを口にほうばった。

塩だけの素朴な味だが、お店で買った物と違い、噛んでいると甘みがジワっと口に広がった。

男衆　「ごちそううさん、さあ仕事始めるぞ。」男衆は立ちあがり工事現場に向かって行った。

【16】貫通石

しばらく経った、ある日のこと、

秀治おやじ　「おーい、子どもたち、いるかい？」秀治おやじの声だ。

「今日、トンネルが貫通するかも知れない・・。」

秀治おやじはすでに早足で歩き始めている。子どもたちはその後に続いた。

工事現場はすでにたくさんの人だかりである。

ドッカーン！！大きな爆発音が中山に響いた。

村の衆　「貫通したぞー！」トンネルの入口で誰かが叫んだ。

秀治おやじ　「行くぞ！」秀治おやじの掛け声で、子どもたちもトンネルに向かって走りだした。トンネルの中ほどまで来た時だ。まだ残っているダイナマイトの煙の向こうに、明るいものが見えた。更地の空だ！

村の衆　「やったぞ。」「ついにやったー！」

人々の声がトンネルに響きわたった。

どの顔もニコニコ笑い、近くの人と手を握ったり、抱き合ったりしている。

秀治おやじがリョウたちに近づいてきた。

「これ、何かわかるか。」おやじは両手を開いて中の物を見せた。

秀治おやじ　「貫通石だ。トンネルが貫通する最後の所の石を『貫通石』っていうんだ。めでたい石だ。だからお守りになる。赤ちゃんを産む時お腹にのせて、『無事に生まれますように・・』って祈るんだ。」

菜奈　「私、持ってもいい？」菜奈が突然言った。

秀治おやじ　「おお、いいとも。菜奈ちゃんは女の子だからね、持ってみな。」

菜奈は両手で包み込むように持って、じっと見つめた。

リョウは菜奈のそんな横顔を見て、菜奈がちょっとおねえさんになったように感じた。

【17】帰還

トンネルが貫通してしばらくしたある日のこと。

リョウ　「ケン、菜奈、ちょっとチャレンジしないか。」リョウが言った。

ケン　「なんだ？」とケン。

リョウ　「中山峠、大砲車押して越えるの、大変だったよなあ・・。でも、もしトンネルの中を大砲車で通ったら何分で通りぬけられるかなあ。」とリョウ。

二人の顔は久しぶりに腕白小僧である。

夕方になった。三人はトンネルの入り口に立っていた。

リョウ　「よし、ここがスタートラインだ。スマホのストップウオッチでタイムを計るぞ。」

ケン　「了解！」

リョウ　「用意！ドン！」

1秒、2秒・・・

「ガタガタガタ・・・」

トンネルの道は、岩がごつごつしている。壁や天井からも岩が飛び出ている。顔が時々冷たいのは、天井から落ちてくる水滴らしい。

20秒。30秒・・・

ケン　「あっ、更地の空が見えてきた！」ケンが叫ぶ。

リョウ　「あと少しだ！」とリョウ。

菜奈　「出たわ！」

目の前が急に明るくなった。

その時である。

「ドドドドドドドド・・・・」トンネルの壁が大きく揺れはじめ、

≪≪ドカーン！！！

三人は大きな渦に飲み込まれていった。

リョウがふと目を覚ますと、そばに大砲車が立っている。ケンと菜奈も倒れている。

リョウ　「ケン、菜奈、起きろ。」

二人も目を覚まし、辺りを見回すと・・・

そこはあの民俗資料館ではありませんか。

【18】母の迎え

「ピポピポピポピポ・・・」
リョウのポケットでスマホが鳴っている。

ケン　「携帯がつながってるぞ。僕たち、帰ってきたんだ！」
電話が鳴るだけなのに、ケンは本気で喜んでいる。

（携帯の母の声）　「モシモシ、リョウ？今どこにいるの。エー！民俗資料館。すぐ迎えに行くね。」

暫くすると子どもたちのお母さんが現れた。

子どもたち　「あっ、お母さん」
「お母さん！」
母に会えるのが、こんなにうれしい事だなんて・・。子どもたちにとって初めての経験だ。
みんなの胸に熱いものが込み上げてきた。

リョウの母　「どこに行ってたの。いくら電話しても繋がらないし・・心配したわよ。」

リョウ　「実はね・・・嘘みたいな話だけど・・母さん聴いて！」
三人は関を切ったように話し始めた。

【19】我が家の宝物

リョウ　「母さん、今言ったこと信じてくれる？」
リョウの母は、奥の大砲車をちらっと見た後、リョウの顔をじっと見つめた。

リョウの母　「信じてくれる？そんなこと・・・
リョウの事は・・・いつも信じているよ。」
母は、ニコッと笑った。

リョウ　「母さん・・・」

リョウの母　「リョウの曾じいちゃんがね、生きてる時に私に話してくれましたよ、中山トンネルのこと。曾じいもトンネルを掘ったんだって。」

リョウ　「えッ！曾じいも掘ったんか。」

リョウの母　「それにね、うちのタンスの奥に、貫通石があるよ。」

リョウ　「貫通石が・・？家に・・？」

リョウの母　「うん、リョウが生れる時にね、このお腹の上にその石を置いたんだよ。」
リョウの母は、自分のお腹にそっと手を置いた。

リョウ　「母さん、帰りに中山トンネル通って帰ろう。」

【20】トンネルとの再会

みんなはトンネルの手前で車を降りた。トンネルを歩いていくと、空気がだんだんひんやりとして来る。トンネル掘りを手伝った時と同じ・・・あの感触。

リョウの母　「曾じいは言ってたよ、トンネルが完成した時の村の人たちの大喜び様、すごかったらしいよ。」

リョウ　「うん！分かる、分かる！そうだったよ！」

「壁も天井もきれいになってるね、母さん。」

リョウの母　「最近きれいに直したんだよ。それまでは狭くてね、壁と天井から岩がごつごつ突き出してたよ。水がポタポタ天井から落ちて来て顔にひんやり当たるんだよ。」

リョウ　「ぼく、きれいなこのトンネルもいいけど、昔のトンネルも・・好きだな。」

リョウと母は、ちょこっと見つめ合いました。

深江と更地の方から中山の方へと、清々しい風がトンネルの中を吹き抜けて行った。

（裏表紙）

中山トンネル物語

2015 年 12 月 31 日初稿完成
2019 年 4 月 10 日　２稿公表

著　者　　藤原 詩響

発行者　　藤原 詩響
発行所　　詩響 ms
　　広島県廿日市市原 1267-161
公表者　　藤原 詩響

―　許可なしに転載、複製することは禁じます　―